

報告

学会専門部会企画としての 高大連携による協働型探究学習の実践 (JAGCE「教育連携部会」企画委員会活動報告)

奥山 則和 A、金丸 紋子 B、村松 教子 C、赤塚 祐哉 D、内田 富男 E

1. はじめに

グローバル人材育成教育学会(以下 JAGCE と略記)では、第2回関東支部大会(2015年6月 於明治大学)において「学校種の枠を超えた横断的グローバル人材育成の可能性を探る」という大会テーマを設定し、シンポジウムではグローバル人材育成における高大連携の可能性について議論された。また、特別企画として大学生(以下学生)と企業人を交えた協働学習のデモンストレーションも企画された¹⁾。

そこで、JAGCE 専門部会「教育連携部会」²⁾では、第3回関東支部大会(於 産業能率大学)において上記のような企画に高校生(以下生徒)を加えて、生徒と学生の連携による協働学習の試みを行った。支部大会の統一テーマ『グローバルな時代に輝く女性たち』を受け、「グローバルに活躍する女性」を課題とした。国立・私立4高校、2大学のチームに企業人メンターが加わり、各チームで対象の人物(女性)を決め、調査を行った。支部大会当日に、英語プレゼンテーション・審査会を開催した³⁾。

教育連携部会企画には、初年度は延べ4高校(国立附属高校・私立高校)、3大学の学生と、各高校・大学に所属する教員、JAGCE の賛助会員有志が参加した。本年度実施した2回目の企画では、東京、神奈川の7校からの生徒と3大学の学生の参加があり、プロジェクトは飛躍的に拡大した。本報告では、主に、本年1月～6月に実施した第2回目の活動について報告する。報告では、実施の経緯、企画の概要と実践上の特徴、方法の詳細、成果、実施上の課題、さらには今後の展開について述べる。

2. 高大連携企画(2017)

2.1 2017 企画の特徴

本報告の中心となる第2回目の高大連携企画実践は2017年6月(於 中央大学高等学校小ホール)に教育連携部会と関東支部の共催の形で行われた。生徒・学生、教師が高大の垣根を越え、グローバルという目標に向かって協働する学び合いの機会を共有する協働型探究学習の実践である。企業人メンターも交えて、東京、神奈川の7つの私立高校の生徒・3大学の学生が参加した。

2.2 実践の展開

2.2.1 協働型探究学習のタスク

昨年度の反省を踏まえ、今回の特徴は、1) 協働型探究学習のタスク、2) テーマ特化型ルーブリック⁴⁾、3) リフレクティブ・ラーニング、の3点とした。まず、指導過程の流れは、①全体の事前対面指導で、趣旨説明の後、発表テーマをチームで話し合う。②後日、テーマを中間報告し、リサーチを継続する。③各自リフレクションシート(SAS I)⁵⁾を記入しプレゼン前に提出する。④英語プレゼンテーションを実施する。⑤終了後にリフレクションシート(SAS II)⁶⁾を提出する。

今回の共通テーマは、“How can we make Greater Tokyo and Japan more comfortable for visitors and residents, both Japanese and non-Japanese?”(グローバル・ローカリズムの視点から見る日本: 次世代が考える居心地の良い Greater Tokyo) その趣旨は、位以下のように説明した。「多くの外国人が訪日(含: 旅行・居住)する今日、身の回りの地域・社会で起きている現象(文化摩擦、共存のための努力等)に目を向けよう。グローバル時代を生き抜くために、日本人と外国人がお互いに気持ちよく共生できる環境を作るために、どんなことができるだろうか。なぜそのエリ

A: 桐蔭学園

B: カリタス女子中学・高等学校

C: 明治大学附属明治高等学校明治中学校

D: 早稲田大学本庄高等学院

E: 明星大学人文学部

アなのか、どのような異文化どうしの出会いがあるのか(対立、相互理解、発見、共生)、その出会いをどう社会に還元するのか。テーマ・内容(message)&『探究の過程』(process)にこだわる。「伝えたい内容」が先で『どう見せるか』は二の次、『若者の感性』を発揮する。」なお、事前説明会では参加者(生徒、学生、引率教員)にいくつかの具体例も示した。

その結果、各チームが最終的に決定した研究・発表テーマは以下の通り(順不同)、とても興味深いものばかりであった。

1. The Language Gap among Stations

(桐蔭学園高校男子部)

2. The Difficulty of Foreign Parents Living in Japan (カリタス女子高校)

3. What Fascinates Foreigners Visiting and Living in Japan? (明治大学附属明治高校)

4. Labor of Foreign Students (中央大学附属高校)

5. Halal Food (中央大学附属横浜高校)

6. What Foreigners Should Do When Disasters Occur? (中央大学杉並高校)

7. 和の精神: CHUMUGUKURU (中央大学高校)

2.2.2 テーマ特化型ルーブリック

昨年度使用したルーブリックの問題点を踏まえ、今回は Rhodes(2009)の複数の例を参考にして、上記のテーマに特化したルーブリックを作成した。評価領域は内容、テーマ、言語の3領域とした。専門審査員^[7]はこれを参考にして審査を行うように、事前に依頼した。但し、点数化はしないこととした。

2.2.3 リフレクティブ・ラーニング

昨年の第1回企画(2016)では、英語プレゼンテーションの最後に口頭(日本語)で振り返りをさせたが、時間の制約等のため改善の余地があり、今回は体験学習を取り入れたことの問題点(Ash & Clayton 2009)と振り返りの重要性(Moon 2004)を踏まえ、口頭だけではなく、書面でも振り返らせ、深い省察ができるようにするために、先行研究・事例(梶 2016、中原 2016 他)を踏まえて2段階の省察のための自己評価票である SELF ASSESSMENT SHEET (SAS) I と II の2種類を独自に作成し、記入させた。SAS では下記の4項目別(A~E)に10段階の自己評価と評価理由の記述を求め、自由記述欄も設けた。

① SAS I(開始~発表前迄)

テーマ設定の妥当性、調査内容・手法の有効性、ルーブリックの活用度、発表準備の達成度、メンターとの関係・支援活用度。なお、ここでは自由記述欄には発表前迄に学んだことを書かせた。

② SAS II (開始~発表後)

チームの協働と私の貢献度、発表の成否、ルーブリックに沿った自己評価、他のチームとの相対評価、聴衆の反応と今後の課題。なお、自由記述欄にはこの経験から学び明日に活かせること、自分の課題(将来に向けた課題の発見)等を含む全体の振り返りを書かせ、回収した。

3. 参加校からの報告

3.1 桐蔭学園高等学校

桐蔭学園高等学校は男女別学制を採用している。そこで、2016年度は大会のテーマ(「グローバルな時代に輝く女性たち」)に合わせて女子部の生徒に参加をさせ、2017年度は男子部の生徒を参加させて学内のバランスを取った。両年度とも参加生徒は、学年教員に依頼して学内公募で集めた。大学受験を意識しつつ、自身を高める学びにも取り組める余裕があるということで、高校2年生に声掛けを行った。

準備に関しては、どちらの年度も生徒の予定を優先し、学生の都合も考慮して引率教員は少し距離を取って見守ることとした。しかし、テーマから必要とされる準備が質的に異なることもあり、同じようにはいかなかった。大学レベルの論文を書くわけではないので、先行研究を調べたりすることもさせなかった。それよりも、生徒と学生が協働してお互いがどう学びあうかを見守ることとした。

2016年度は、女子生徒が女子学生と一緒に、グローバルに活躍している女性を見つけ、なぜその女性がグローバルに活躍しているといえるかを聴衆に訴えるものである。生徒が選んだ人物は、日本人歌手でボランティア活動にも熱心な MISIA 氏であった。

指導者の関わりの多くは学生と生徒の予定の調整であり、生徒が部活動のない放課後に神奈川と東京の境目まで学生が予定を合わせて(顔合わせ以外に)2回も来てくれた。準備は生徒がぼんやりとイメージしていることを学生が質問を繰り返して生徒に言語化を強いることで、発表の方向性が明確になっていった。言語活動に優れた女性たちのチームワークのたまもので

ある。

方向性が定まったところで考査期間に入り、課外活動全面禁止となる考査1週間前までには発表原稿や発表資料の素案は共有フォルダーに入れ、全員がアクセスできるようにした。そして、生徒たちがこの活動に関われない時期には、学生がその共有フォルダーにある原稿やパワーポイントにコメントを入れるようにした。考査最終日の午後には引率者の立ち会いの下、生徒たちが学生のコメントを基に、原稿やパワーポイントの手直しを行った。それをさらに学生と情報共有し、発表当日の学校からの移動の最中まで編集は行われ、本番に向けて、練習に励んでいた。リハーサルで得られたメンターの助言を活かす時間が十分にあった。

2017年度は、「居心地の良い Greater Tokyo」というテーマであったためにフィールドワークが必要となった。また、今回は大学附属校が参加校の多数を占め、卒業生の活用が進んだが、この点、本校は系属校によるサポートは特段なかった。

幸い準備に関しては、前年の反省を踏まえてゴールデンウィーク前に顔合わせを行ったので、顔合わせで練られた計画に即してゴールデンウィーク中にじっくりとフィールドワークをしてもらうつもりであった。

前年は生徒と学生の2対2の組み合わせであったのが、今回は生徒最大4名・学生基本1名という組み合わせとなった(本校は2対1)。この組み合わせは、一人の学生が対話をリードし、生徒が「お客さん」になってしまったような印象がある。実際、本校生徒は、テーマに関し具体的なイメージを持つ前に、学生が提示した案に乗ってしまった。生徒があまり深く考えないのは、黙っていれば学生が答えを出してくれるイメージを持っていたようであり、メンバー同士の対話を目の当たりにする機会はなかった。そういう意味で、本校生徒の準備は甘く、進捗状況の説明も要求されたことの最低限のことしか満たしていなかった。そこで何度か再調査を担当教員が指示し、サポート学生からも助言をお願いした。しかし、そもそもクラウド上の共有フォルダーに必要な情報が上がってくるわけでもなかったのが、準備はスムーズにいかなかった。バイタリティー溢れる学生がついてくれているが、もったいなかった。

本校の研究テーマは東京駅と十日市場駅の表示に使用されている言語の違いを見ることとした。多くの国

や地域から訪問者が多数訪れる駅(東京駅)と、グローバル化が進みながら(インド人コミュニティが形成されつつある団地を抱える)ローカルさが残る駅(十日市場駅)との比較であるが、考察から結論まですべて予想通りとなり、物足りなさは残った。

両年度ともいろいろと課題が感じられた生徒の参加であったが、リハーサルでアドバイスをいただいた企業人と生徒たちの関係は切れていない。事後に手書きの礼状を送り、筆者がメンターと会々と生徒たちの近況が話題になるなど、その後も気に掛けていただいているのはうれしい。(文責 奥山)

3.2 カリタス女子高等学校

本校は2年連続でこの企画に高校2年生が2名ずつ参加した。語学に対する興味だけでなく、視野を広くグローバルマインドを養うためにさまざまな企画に積極的に参加する生徒たちである。どちらのペアも1名はフランス語を第一外国語として選択している生徒ではあるが、英語のプレゼンテーションに熱意をもって取り組み、その様子は複言語教育をグローバル教育の柱の一つとしている本校にとっては、ぜひ多くの生徒たちに目指してほしい姿であった。

学生と生徒の協働からそれぞれが学ぶものがあることが企画の狙いであるため、メンバーの顔合わせ、テーマの選定、発表内容や方法に関しては基本的に学生のリードに任せた。そのため発表に至るまでにはやり取りがスムーズにいかないこともあり、発表に関しても説得力に欠ける箇所もあったが、基本的に教員の関与は事務的なやりとりに抑え、見守ってきた。

第1回合同ミーティングにて、課題や取り組み方、評価方法等は明示されたため、生徒たちはできるだけ「等身大の自分たちの視野や価値観を大事にしながら」取り組む調査や発表を心掛けることができた。実際には、本や雑誌、ウェブサイトで調査したり、フィールドワークに出かけたりして、生きた情報を発表内容に盛り込むよう努めて、本番当日を迎えた。その過程において、学生によるリードは非常に心強く、生徒もその姿から多くを学び、刺激を受けた。実際に、生徒たちは通常の学校生活に戻ったあとも、学校生活中で様々な場でのリーダーシップを発揮することができるようになった。

第1回企画に参加した2人は、本番当日では制限時

間に発表を終わらせることができず、悔しい思いをした。そこで、本人たちの熱意もあり、校内でもう1度プレゼンテーションをする機会を設けた。学期末の全校集会で1,200名の生徒を前に堂々と披露することができた。発表の当日は、メンターや審査員から様々なフィードバックをいただいた。それを可能な限り、自分たちのプレゼンテーションに盛り込み、この再度の挑戦では、内容はさらに洗練されていた。ここにたどり着くまでのプロセスにおいて、生徒たちは多くを学び、成長したことは全校生徒と教職員にも伝わった。何よりも発表した生徒本人たちがその成長を実感したことは間違いない。(文責 金丸)

3.3 早稲田大学本庄高等学院 (第1回企画参加)

本企画(第1回)のために生徒4名と担当教員が対面で打合わせや練習のための時間を確保することは難しかったため、主に電子メールでメッセージのやりとりを行いながら指導せざるを得ない状況であった。指導の内容は、プレゼンテーションの原稿に対する助言、文献調査の方法等である。対面による指導も行い、1)人物選びの基準、2)ループリックの説明、3)探究型プレゼンテーションについて、と本番直前のリハーサルで指導した。

指導に際して特に、国際バカロレア・ディプロマプログラム(DP)の「TOK」(Theory of Knowledge)の探究型プレゼンテーションの手法⁸⁾を参考にした点の特徴である。TOKは高校生の探究心や異文化理解を深めるものとして定評がある。具体的には、本質的な問いとはオープンエンドな問いであり、かつ世の中の諸課題にも対応できる汎用性の高い問いであることを教え、実際にそうした問いを立てさせた。その上で、グローバル社会で解決すべき課題をプレゼンの中に1〜2つ盛り込み、本質的な問いに対する答えを示すよう指導した。

生徒達は公民権運動の活動家ローザ・パークスを取り上げた。当初は彼女のライフストーリーや功績を紹介するといったいわゆる情報伝達型のプレゼンとして構成していた。だが、TOKの手法を取り入れたことにより、プレゼンに本質的な問いを盛り込むことができた。本質的な問いを「ローザ・パークスが21世紀に生きていたら、どの程度社会に変化をもたらしていたらだろうか。」とし、プレゼンの内容も探究的になった。



生徒達は、さまざまな差別を英語によるウェブサイトで調査し、その解決方法を提案するなどしたが、探究のプロセスに関する指導が十分でなく、インターネット上の情報に頼りすぎ、学術論文等からの引用は少なかった。

生徒達の満足度は高かったようで、「英語によるプレゼンテーションスキルの向上だけではなく、グローバルな社会での私たち高校生の役割も認識できました。今回の学会発表の経験を活かし、今後もローカル・グローバルに関わらず、課題解決のために積極的に行動していきたい。」と述べていた。本企画への参加をきっかけに出場者の1人は早稲田大学の学部進級要件として課せられる本学院での卒業論文のテーマを探究型英語プレゼンテーションにすることを決めたそうである。(文責 赤塚)

3.4 明治大学付属明治高等学校 (第2回企画参加)

本校では、担当教員自身が初参加であり様子があまり分らなかったことと、準備時間があまり長くないことを考え、参加生徒の人選にあたってはフィールドワークに慣れている地理研究部所属の高校生に参加を依頼した。結果的にこの判断は正解であったようだ。メンバーは部内で決定してもらい、3学年より1名ずつ発表することになった。学生は部の卒業生で明治大学に進学したOBに依頼した。

地理研究部は毎年テーマに基づき日本各地にフィールドワークに出かけており、そのスキルは部活動を通じて全員が身につけていた。また、調べたことをまとめ、考察し文化祭で発表しているため、本企画でどのようなことが要求されているか説明する必要がなかった。加えて、スライドを使用し、制限時間内に英文で

話をまとめることは英語の授業を通じて全員が指導を受けている。校内イングリッシュ・プレゼンテーション・コンテストの準備の手法が役立った。仮説を立て、下調べを行うことについては英語科と図書館が共同で中学生の頃から指導をしているため、資料の探し方についてもある程度の知識がある。前提条件が揃っている生徒に参加してもらったが、十分に練って当日を迎えることができなかったため、心残りの部分もあった。4月から本番までの間に学校行事、考査等があり、メンバー全員が集まり、準備をするにはかなりタイトなスケジュールであった。そんな中、地理研究部の部員一同、発表、およびクラブ顧問（社会科教諭）にはブレイン・ストーミングの段階から全面的に協力してもらい、非常にありがたかった。

テーマを決定するまでに多くの時間をかけた。1)フィールドワークだからこそ得られること、2)学校がある多摩地区であること、3)考察できること、という3点を満たすテーマを見つけるのは難しかった。「グローバル」の定義がそれぞれ異なることも大きな要因であった。十分な議論をする時間もなく、参加生徒は調布市国際交流センターで実施されている日本語授業受講生の外国人から話を聞いてきた。インタビュー後の調査に時間をかけられず、インタビュー内容をまとめ、それに提案を加えるだけの形となった。消化不良だった部分もあったが、短時間で準備をすすめたこと、校外で発表したこと、他校の発表を聞いたことは生徒たちにとっていい経験であった。(文責 村松)

4. リフレクションの分析と成果

本章では、独自に作成した2種類のリフレクションシート(SAS I、SAS II)に書かれた生徒の自由記述や審査員、聴衆のコメントを基に成果としてまとめる。英語やプレゼン(英語表現、audience awareness等)に対する興味・関心や気づきと英語や学習全般(知識、教養、技術)の意欲の向上、探究学習への問題意識、学生からの学び、協働学習への関心、非日常性(普段の授業ではできない経験)、その他(大人になった気分、この経験を大学で活かしたい、度胸がついた、やってよかった、将来役に立つ)などである。

リフレクションシート(SAS I、SAS II)における10段階の数値評価(図1)を複数の項目の平均・最頻値を見る限り、概ね自己評価は高め(項目1A・1B・2A・

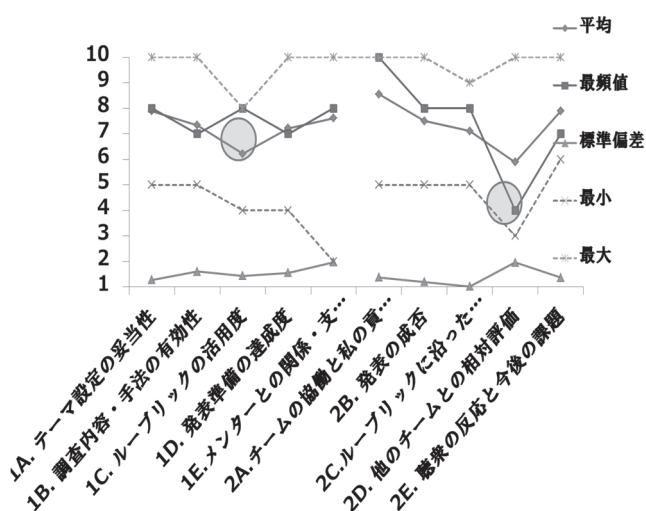


図1 リフレクションによる自己評価

2B)である。いくつかの項目で評価10とした生徒もあり、自己評価の高さは満足度の表れとも言えよう。図中右に円で示したグループ間の相対評価(項目2D)は控えめな回答となっている点は興味深い結果である。また、図中の円左に示したルーブリックの活用度(項目1C・2C)も低めである。ルーブリックが英文であったことと事前説明が不十分であったことに起因する可能性がある。メンターの役割(項目1E)が曖昧なケースが見られるが、この項目の評価はチームのメンターとの関係性に依存する面もある。第1回企画では、こうしたシートはなく、口頭での反省のみであったが、今回、リフレクションシートを記入させたことで、生徒の振り返りと本企画の評価を実施できた点は一歩前進といったところだろう。無論、評価票の改善は必然である。(文責 内田)

5. 課題と展開

学校によって担当教員の介入方法や程度はさまざまだが、基本的に生徒たちの主体性を重んじ、連絡調整役とした学校が多い。学生の活用方法もまた参加校によって異なる。それによって見えてくる成果や課題もさまざまだが、まとめると、募集と実施時期、テーマの選定(例 範囲、地域性)、ルーブリックの改善と活用、ルーブリックとリフレクションシートの統合化、ルーブリックの活用に向けて事前指導の改善等課題は少なくない。学生の役割とその事前指導、卒業生の活用、参加校(例 公立校)等も課題である。

さらに実践研究のアプローチとして、今後はリフレ

クシオンシートの量的分析による検証へと発展させ、本研究を深めていきたい。こうした取り組みは近隣の地域で、地元の大学や高校教員、企業が連携をして機会を提供することができ、行政や1つの大学とは異なり学会としてできる社会貢献の良い一例となるだろう。

最後に、教育におけるグローバル化への対応はしばしば喫緊の課題と言われるが、大学入学前の教育課程では、教科・科目の枠組みではなく、学習課題・テーマとしての「グローバル」という位置づけであるため、生徒は授業の中で学ぶことは少ない。課外の学習としてこのような企画に参加できた生徒は恵まれている。グローバル化のための教育と教育のグローバル化に積極的な教職員や学校、保護者の理解と協力は実現しない。また、異なる立場でそうした教育に関わる大人の連携をきっかけに生徒が狭い教室を飛び出して、英語力に留まらずグローバルな時代に求められる力(Global Competency)を身につけるためにチャレンジしてほしい。

謝辞

本企画の実現と大きな成功は、多忙な学校生活にもかかわらず任意参加してくれた生徒と学生の皆様のお蔭です。そしてこのような機会と環境を与えてくださった学校関係者の方々、とりわけ直接、ご指導をいただいた担当の先生方にこの場を借りて深く御礼申し上げます^{[9][10]}。また、会場の産業能率大学、中央大学

高等学校の関係者の皆様、本企画のために学生をご紹介いただいた学会員、とりわけメンター等のご協力を頂いた賛助会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

注

[1] この企画ではグローバル教育ブートキャンプの企画提案という課題に対して学生グループに企業人のメンターを加えて、企画立案と英語プレゼンテーションを行った。

<http://www.j-agce.org/kantobranch/kanto-2report/>

[2] 専門部会「高大連携部会」は「教育連携部会」と名称を変更した。<http://www.j-agce.org/committee/>

[3] 第1回企画については下記の取材記事（内田・金丸）及び支部大会報告を参照されたい。

教育人会議 「グローバルな時代に生きることの味を考える」（「連載 輝け！ 若者たち 01」）2016 年秋号 発行：2016.9.30. 20 頁

<http://frompage.pluginfree.com/weblish/frompage/1724103598/index.shtml?rep=1>

JAGCE 第3回関東支部大会報告

<http://www.j-agce.org/wp-content/uploads/2016/07/reopt160604.pdf>

[4] 2017年度の第2回企画では Association of American Colleges & Universities (2017) を参考にして、次のルーブリック（英文）を作成し、使用した。（作成 内田）

JAGCE Rubric Criteria with Descriptors 2017

	1. Content	2. Inquisitiveness toward global/local issues	3. Language
	- The topic is clear and supported with good examples. - The topic and content maintain the audience interest.	- Adequate awareness of cultural diversity and various world views and/or - Adequate engagement with and understanding of cultural diversity and/or - Adequate analysis and for civic engagement	- Effective use of language techniques - Effective use of voice & body language (para-language) - Effective use of visuals
4-5	- The topic is clearly explained with detailed descriptions and examples. - The topic and content hold the audience interest throughout the presentation.	- Deep understanding of multiple world views and of the complexity of elements important to members of other culture(s) in relation to their cultural background and/or - Actively initiating meaningful interaction with other cultures to address significant global/local issues and/or - Connecting and extending knowledge (facts etc.) from one's own study/field/discipline to civic engagement and to one's own participation in civic life	- Very effective use of language: vocabulary and expressions. - Very effective use of variation, tone and speaking volume, and good pacing. Very good use of body language, eye contact, and body movement. - Visuals very well presented.

2-3	• The general idea of the topic is explained, the student fails to provide good examples. • The topic and content hold the audience interest through much of the presentation.	• Understanding the complexity of elements important to members of another culture in relation to their cultural background and/or • Incorporating respectful interactions with other cultures and/or • Analyzing knowledge (facts, etc.) from one's own study/field, and making relevant connections to civic engagement and to one's own participation in civic life	• Fairly effective use of language techniques: vocabulary and expressions. • Some good use of variation, voice volume, tone, and pacing. • Good body language, eye contact, and movement. • Visuals are clear.
1-2	• The topic is not very clear, and / or the provided examples are not clearly related to the topic. • The topic and content hold the audience interest for only a limited part of the presentation.	• Understanding the surface of the complexity of elements important to members of another culture in relation to their cultural background and/or • Showing some openness to varied cultures and worldviews, and some willingness to interact with them and/or • Beginning to identify knowledge (facts, etc.) from one's own study/field that is relevant to civic engagement and to one's participation in civic life	• Minimal use of effective language techniques: vocabulary and expressions. • Minimal use of vocal variation, pacing, body language, eye contact, and movement. • Visuals are not particularly clear or are too small.

(参考：ループリックの日本語版 奥山訳)

次世代が発信する：グローバル・ローカルな視点：首都圏に在住者・訪問者、日本人・外国人双方がより過ごしやすいようにするにはどうしたらいいのか？

JAGCE ループリック 2017 版

	1. 内容	2. グローバル・ローカルな問題に対する探究	3. 言語
	● トピックが明瞭で、良い例によってサポートされている。 ● トピックと内容は聴衆の注目を集めている。	● 文化的多様性そしてさまざまな世界の視点に対し、知識として十分に意識している。 そして／または ● 文化的多様性に関し十分に言及し、理解している。 そして／または ● 市民参加に関し、十分に分析した知識がある。	● 言語技術の効果的な使用 ● 声量と身体言語の効果的な使用 ● 視覚資料の効果的な使用
4-5	• トピックは、詳細な描写と例によって明瞭に説明されている。 • トピックと内容がプレゼンテーションを通じて聴衆の関心を引きつける。	• 世界にはさまざまな視点があり、文化的背景を基に、異なる文化に所属する人にとって大切なことがそれぞれ複雑に異なることを、深く理解している。 そして／または • 重要なグローバル・ローカルな問題を提議するために、他の文化と意味のある交流を率先して始めている。 そして／または • 市民参加に関する自身の学び・活動・専門と、市民生活への自身の参加により知識・事実を活用しさらに広げている。	• 言語技術の効果的な使用：語彙と表現 • 表現の豊かさ、語調、声量とペースが効果的。身体言語、アイコンタクト、動作も非常に良い。 • 視覚資料は効果的に表示されている。
2-3	• トピックの概要は説明されているものの、例が弱い。 • トピックと内容は聴衆の関心を、プレゼンテーションの大部分の時間ひきつけている。	• 人びとが大切にすることはその人の文化的背景によって異なり、またそれは複雑であることを理解している。 そして／または • 異文化との尊敬の念を持った交流を、組み入れている。 そして／または • 関連ある市民参加への従事、市民生活への自身の参加、あるいは自身の学び・活動・専門からの知識を分析している。	• 語彙や表現などの言語技術のある程度効果的な活用。 • 表現の豊かさ、声量、語調、ペースは良い。ボディランゲージ、アイコンタクト、動作も良い。 • 視覚資料は明瞭。
1-2	• トピックが明瞭ではない、そして／または、例とトピックとの関係が明らかではない。	• 人びとが大切にすることはその人の文化的背景によって異なり、またそれは複雑であることを理解している。 そして／または	• 語彙や表現等言語技術の活用は限られている。 • 声質の変化、ペース、

・トピックと内容は、聴衆の関心をプレゼンテーションの一部でしかひきつけられない	・文化や世界観の多様性にある程度の寛容さを示し、それらと交流しようというやる気を少しは見せている。 そして／または ・市民参加や自身の市民生活への参加に関して、自身の学び・活動・専門からと関連がある知識を認識しだしている。	ボディランゲージ、アイコンタクト、動作はあまり使われない。 ・視覚資料は明瞭ではないか、小さすぎる。
---	---	---

[5] リフレクションシート(SAS I)

学びの達人、ふしぎの達人



REFLECTIVE LEARNING: SELF ASSESSMENT SHEET I

テストヒューズ

【記入日】 6月 日 【学校名・学年】

高等学校 年 【氏名】

チームのテーマ：

☆ SELF-REFLECTION 1 (開始～発表前迄) 学会前日までに記入・当日集合の際に提出して下さい											
★ 自己評価の観点	× 自己採点 (得点) ◎										評価理由の記述
テーマ設定の妥当性 A 「グローバルizm・ローカリズムの視点から見た日本」という企画テーマにふさわしいテーマだったか？	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
調査内容・手法の有効性 B チームで設定したテーマの調査方法として適切であったか？ フィールドワーク等の成果（フィールドワーク等の結果は計画段階に期待した通りだったか？）	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
ルーブリックの活用度 C ルーブリックの内容を常に参照し、うまく使ったか？	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
発表準備の達成度 D 口頭発表の準備はどの程度計画通り行った(10%~100%)？	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
メンターとの関係・支援活用度 E 大学生とよい関係を構築し、サポートを上手に活かした	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
自由記述欄（発表直前、ここ迄に学んだこと）											

Without reflection, experience alone might cause us "reinforce stereotypes...", offer simplistic solutions to complex problems and generalize inaccurately based on limited data (Ash & Clayton, 2009, p26).

[6] リフレクションシート (SAS II)

おひじゅいひ、あひじゅい

Look back to go forward.

REFLECTIVE LEARNING: SELF ASSESSMENT SHEET II



【記入日】 6月 日 【学校名・学年】

高等学校 年 【氏名】

チームのテーマ：

☆ SELF-REFLECTION 2 (開始～発表後) 発表後1週間以内に、各校の担当の先生に提出して下さい											
★ 自己評価の観点	× 自己採点 (得点) ◎										評価理由の記述
チームの協働と私の貢献度 テーマ設定から発表まで大学生を含めチームメンバーで協力しながら課題を遂行できたか？ 自分はチームにどの程度貢献したか？	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
発表の成否 B あがらずに時間内に英語を駆使して効果的なプレゼンができた	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
ルーブリックに沿った自己評価 C ルーブリックの規準で自分自身を評価するとどのような評価か？	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
他のチームとの相対評価 D 最もよいチームはどのチームか。そのチームを評価5とすると、自分のチームはどの程度の評価か？	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	最もよいと思った他のチーム[]高校
聴衆の反応と今後の課題 E プレゼン中やプレゼン後のジャッジや聴衆の反応は期待通りだった	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
自由記述欄 (この経験から学び明日に活かせること、自分の課題(将来に向けた課題の発見)等を含む全体評価)											

©JAGCE 2017

[7] 専門審査員一覧 (敬称略)

Lars Nicolaysen (Bureau Chief Tokyo at dpa German Press Agency Deutsche Presse-Agentur)

Stephen Hesse (中央大学教授・国際センター副所長)

YihYehPan (産業能率大学准教授)

Dr.Ananda Kumara(JAGCE 副会長 名城大学教授・外国語学部長)

勝又美智雄 (JAGCE 理事・国際教養大学名誉教授)

- [8] TOK の探究型プレゼンテーションの手法については、以下の資料を参考にした。
国際バカロレア機構. (2015). ディプロマプログラム (DP) 知の理論(TOK)指導の手引き. pp.66-69. Cardiff, UK: International Baccalaureate Organization (UK) Ltd.
<http://www.ibo.org/contentassets/93f68f8b322141c9b113fb3e3fe11659/tok-guide-jp.pdf>
- [9] 受賞した学校は次の通りである。
第1回高大連携企画@第3回関東支部大会
ルーブリック評価部門賞 早稲田大学本庄高等学院
Best Global Figure 賞 カリタス女子高等学校
Good Presentation 賞 桐蔭学園高等学校女子部
個人賞 桐蔭学園高等学校女子部 (2名)
第2回高大連携企画@第4回関東支部大会
専門審査員賞 (Rubric 評価) 中央大学附属高等学校
研究奨励賞 カリタス女子高等学校
関東支部長賞 (Good Presentation 賞) 明治大学付属明治高等学校
賛助会員特別賞 桐蔭学園高等学校男子部
次世代評価賞 (参加者の相互評価) 中央大学附属横浜高等学校
新視点提供賞 (Point of View 賞) 中央大学杉並高等学校
学会員特別賞 (Great Presenters) 中央大学高等学校
- [10] 参加校引率教員一覧
中央大学高等学校: 大滝靖司
中央大学附属高等学校: 森田太郎・岩本祐樹
中央大学杉並高等学校: 大塚圭
明治大学付属明治高等学校明治中学校: 村松教子
中央大学附属横浜高等学校: 岡田充功・勅使川原あゆみ
カリタス女子中学高等学校: 金丸 紋子
桐蔭学園: 奥山則和・J グラジアニ
- 2) Association of American Colleges & Universities. (2017) *Inquiry and Analysis VALUE Rubric*. Retrieved from <https://www.aacu.org/sites/default/files/files/VALUE/InquiryAnalysis.pdf>
- 3) Dymoke, S. ed, (2012). *Reflective Teaching and Learning in the Secondary School* Second Edition. UK: Sage.
- 4) Moon, J. A. (2004). *A Handbook of Reflective and Experiential Learning: Theory and Practice*. UK: Routledge.
- 5) Rhodes, T. (2009). *Assessing outcomes and improving achievement: Tips and tools for using the rubrics*. Washington, DC: Association of American Colleges and Universities.
- 6) 内田富男. (2017). 「教育連携部会」における高大連携企画の実践報告. グローバル人材育成教育学会九州支部大会予稿集.
- 7) 梶浦真. (2016). アクティブ・ラーニング時代の「振り返り指導」入門 第5版. 教育報道出版社
- 8) 中原淳・日本教育イノベーションセンター. (2016) アクティブ・ラーナーを育てる高校. 学事出版.

受付日 2017 年 8 月 30 日、受理日 2017 年 9 月 18 日

引用・参考文献

- 1) Ash, S.L., & Clayton, P. H. (2009). Generating, deepening, and documenting learning: The power of critical reflection in applied learning. *Journal of Applied Learning in Higher Education*, 1(1), 25-48.